

東北は今、新時代に向けて

東北電力株式会社 取締役副社長 佐藤 晃郎



縄文文化が、東日本とりわけ東北地方において顕著な発展を見せたことは、これまでの考古学研究でよく知られているところである。

特に、最近、青森市近郊の三内丸山遺跡で、約4500年前のものと推定される巨大建造物跡が発掘され、その一帯には、1500年にわたり多くの縄文人が定住していたのではないかとわれ、考古学者は、古代史が大きく塗り変わるであろうと分析している。

遺跡から発掘された植物の種子、動物の骨などから、当時の気温は現在よりも数度高く、鯛、鮭などの海の幸、胡桃などの山の幸に恵まれ、狩猟採集文化として最も進んだ生活を営んでいたようで、その姿が目に浮かんでくる。

東北地方は、その後、蝦夷社会の発展と、奈良時代末期から平安初期にかけて時の朝廷による蝦夷征伐、300年ほどの時を経て奥州藤原四代にわたる黄金文化の開花と滅亡があった。さらに、江戸初期、伊達政宗は、南蛮との通商を企画し、支倉常長をスペイン、ローマに派遣した。残念ながら徳川幕府のキリシタン禁制強化のため目的は達しなかったが、最近復元された航海船サン・ファン・パウティスタ号に往時の雄図が偲ばれる。

近代に入っては、明治新政府に最後まで抵抗し、賊軍として戊辰戦争に破れた重荷は決して小さいものではなかった。

このように、東北地方は栄枯の流れの中に悠久の歴史を刻んできたといえよう。

ひるがえって、わが国の第二次世界大戦後50年の復興と繁栄も成熟期を迎え、政治、経済、社会が、知識産業の生長、長寿社会の到来、規制緩和の進展などのうねりの中で、大きな変革、転換を

迫られている。

高度成長のシンボルであった東京は、今や、地価の高騰、環境の悪化、交通難、水資源・エネルギーの確保、多人種問題などさまざまな形で集中の弊害が現われてきている。

これに比し、東北地方は、わが国の21%を占める広大な土地と、25%を占める豊富な水資源、ゆとりある生活環境に恵まれ、日本に残された唯一のフロンティアであり、大きな発展が期待される。しかも、単に、東京を真似て追いつくのではなく、東北の利点を生かし、オリジナリティのある地域開発を進めることが求められている。

幸い、東北地方には、恵まれた自然条件のほか、全国に先駆けた産学協同研究の実践について伝統と歴史があり、環太平洋、環日本海圏を直接結ぶ地理的優位性がある。これからのわが国の先端的な研究開発や国際交流の拠点となり得る地域である。

その具体的展開の1つが、昭和62年にスタートした「東北インテリジェント・コスモス構想」である。

本構想は、産・学・官が一体となり、東北地方を日本の頭脳と産業開発の国際拠点にしようとするもので、学術・技術・情報の機能を集積し高度化をはかることを基本戦略としており、基本プロジェクトとして「研究開発」「新産業育成支援」「高度情報化」「基盤整備」の4つを掲げている。

研究開発プロジェクトについてみると、独創的科学的技術開発拠点としてのR&Dが、すでに東北

7県に12研究所設立されている。研究内容は、電気通信、新素材、バイオ、医薬品、農業、畜産業、水産業など極めて多岐にわたっている。

また、新産業育成支援プロジェクトは、独創的な研究開発の成果を活用した新産業開発だけでなく、既存の地場産業や農林水産業などの先端技術化も推進しようとするもので、各県にあるインキュベーション機関と緊密な連携のもと取り組んでゆくこととしている。

また、高度情報化プロジェクトは、東北地方の情報発信基地としての機能を高めるため、光ファイバー通信網の整備、産学交流支援をはかる東北独自のデータベースの構築、高度情報通信サービスを提供する東北レポートシステムの形成などを推進することとしている。

さらに、基盤整備プロジェクトに関しては、東北地方の有する資源を真に価値あるものとするためには、インフラの整備が喫緊の課題である。特に、高速交通体系の充実は、地域活性化に寄与するところが大きく、南北の縦貫のみでなく東西の横断自動車道の建設、新幹線の整備などは、過密化と過疎化に歯止めをかけ、21世紀の国土の均衡ある発展にとって不可欠である。

これらのプロジェクトを推進するための協議会が設置されているが、東北7県が広域的連携のもと一体となり、各県、各大学、各企業から人材を派遣し、戦略的政策の実現に取り組んでいることは特記すべきことであろう。

一方、東北地方には、先にも述べたように特色ある伝統文化が歴史の中に生き続けてきた。伝統文化の発掘、保全、振興と、それをベースにした新しい文化の創造も大きな課題である。

北海道、東北8道県および経済団体等で構成する北海道・東北21世紀構想推進会議では、「ほくとう銀河プラン」を平成6年4月に取りまとめたが、その4つの戦略プロジェクトの1つに、ほくとう文化圏創造構想がある。芸術文化創生と歴

史・文化回廊整備の両事業を提言しており、具体的には、交流の場としての芸術文化振興センターの整備、創作・交流・居住の場としての国際芸術家村の整備や、縄文文化、日本海交易、氷雪祝祭などのテーマにもとづく回廊の設定、整備をすすめることとしている。

しかし、夢と希望のあるプロジェクトを実現し、継続的に発展の輪を拡げてゆくためには、人材の発掘、育成、活用と自助努力の精神の涵養が最大の課題である。

会津藩が戊辰戦争に破れ、明治4年、23万石からわずか3万石に減封され、下北半島の地において辛酸の生活を強いられながらも、なお、むつ円通寺に藩校、日新館を開校し、子弟の教育に情熱を傾けたという。

仕事柄、自治体関係者との交流も多いが、活性化されている市町村とそうでない所にはかなりの格差が出ている。その分れ目は、情熱と情報と独創性を持ったリーダーが存在すること、それを実践につなぐ活力と行動力を持った組織が存在することである。

そのためには、産・学・官が協力して地域教育活動の継続的支援をすすめ、ネットワーク化してゆくことが必要である。

これからの独創的、先端的発想は都会の喧噪の中から生まれるのではなく、落ち着いた森と緑に囲まれた透明な自然の中から育まれるのではないだろうか。

産業活動の水平分業化が、地方を通り越してアジア地域に分散する傾向がみられるなかで、東北地方が、グローバルな戦略を持って優位性を保つため、知的、物的資源を高度化するこれらプロジェクトは、日本のためにも、世界のためにも大きな役割を果たさだろうと信じ、その一端を担ってゆきたいと思う。